

## “Not or don’t, that is the question.”: *I hope not* vs. *\*I don’t hope so*\*

松 瀬 憲 司

Kenji Matsuse

(Received September 29, 2017)

In Present-day Standard English (PSE) there are some lexical verbs which also have a peculiar negative construction, namely *do*-less negation, such as *They know not what they do*, in spite the fact that *do* negation is normally the rule for them, like *They don’t know what they do*. Diachronically speaking, these two negative constructions belong to what we call “Jespersen’s cycle,” the former of which is its stage III beginning in the early Modern English period and the latter, its stage I’ (= IV and V in the original) which we are on now. The reality is, however, stranger: we have a verb that seems not to have completely been in the stage I’ even in PSE, too. It is the verb *hope*, for we usually cannot use *don’t* as the negative marker for its declarative sentences: *\*I don’t hope it rains*. This is a typical example of lexical diffusion seen in *do* negation as a syntactic change. Since the verb *hope* has a rather strong semantic content, i.e., “desire,” it is semantically hard to negate in its declarative sentences, especially when they have *I hope*. Its negative side, then, seems to be propitiously taken by *I’m afraid* instead, so that *I hope* and *I’m afraid* can be complementarily distributed.

**Key words :** *do*-less negation, *do* negation, Jespersen’s cycle, lexical diffusion, complementary distribution

### 1 はじめに

現代標準英語 (Present-day Standard English: PSE)における *think*, *believe*, *suppose*, *seem*, *imagine*等のいわゆる「思考」動詞に関して, Swan (2016<sup>4</sup>)は, これらが否定命題と共起する場合, 主節の動詞も従属節の動詞も共に否定可能だが (生成文法で言うところの古典的「否定辞繰り上げ (neg-raising)」), (1a)の方が (1b)よりも, また (2a)の方が (2b)よりも自然であるとしている。

(1) a. I **don’t** *think* you’ve met my wife.

b. I *think* you haven’t met my wife.

(2) a. I **don’t** *believe* she’s at home.

b. I *believe* she isn’t at home.

(§ 19, 219)

しかし, このことは, 上記動詞と類似の意味を持つと考えられる *hope*には当てはまらない。

(3) a. *\*I don’t hope* it rains.<sup>1)</sup>

b. I *hope* it doesn’t rain.

(§ 19, 219)

さらには, これらの動詞は, 従属 *that* 節を繰り返さない「短い返事 (short answers)」に現れると, 肯定命題の場合,

(4) のように *so*が必須だが,

(4) a. Is Alex here? — I *think so*./\*I *think* that Alex is here.

b. Do you *think* we’ll be in time? — I *hope so*./\*I *hope*.

(§ 31, 585)

否定命題の場合, *believe*, *suppose*, *think*等は, 以下の(5)のように二通りの言い方が可能である。しかしここでも, *hope*の場合, *\*I don’t hope so*は容認されず, (5b)のような否定辞 *not*を後置するタイプの *I hope not*でなければならない。<sup>2)</sup>

(5) a. Do you *think* it’ll snow? — I **don’t** *believe/suppose/think/\*hope so*.

b. Are we going to see Luke again? — I *believe/suppose/think/hope not*.

(§ 19, 219 & § 31, 585)

ただ, *I think not*に関して Swan (2016<sup>4</sup>: § 19, 219)は, “*I don’t think so* is more common than *I think not*, which is rather formal.”と述べている。

そこで本稿では, PSEにおけるこのような特定の語彙動詞群に見られる, 否定平叙文での特殊な振る舞いを英

語史的観点から議論していくが、上述の事実から既に幾つかその背景となる通時的論点が見つかるので、それらをまず以下の各節で順次取り上げる。そしてそれらを踏まえて5節で特に焦点となっている hope について検討し、全体を6節でまとめることにする。

- (6) a. 否定方法の変遷：「not 単独否定 (do-less 否定)」か「助動詞 do を伴う否定 (do 否定)」か  
 b. 否定辞繰り上げ：think-group vs. know-group と「小規則」vs. 「大規則」  
 c. 従属 that 節の so による置換：古英語 (Old English: OE) swa 'so' の機能変化

## 2 否定方法の変遷

いわゆる Jespersen's cycle と呼ばれる、デンマークの英語学者 Otto Jespersen が今から 100 年前に提唱した「否定辞循環生成論」がある。英語だけでなく、フランス語など多くの言語にみられる現象だが、英語に関する循環を、Willis (2016: 466) の Table 1 を改変して (7) として提示する。

- (7) a. Stage I:        ic ne secge        (OE)  
 b. Stage II:        I ne seye not        中英語 (Middle English: ME)  
 c. Stage III:        I say not        初期近代英語 (Early Modern English: EModE)  
 d. Stage I':        I don't say        (PSE)<sup>3)</sup>

英語における否定構造の代表的なものは、OE 期に (7a) の動詞前置 (preverbal) 否定辞 ne による単独否定に始まり、ME 期にそれを動詞後置 (postverbal) not (< OE *nawiht* 'nothing' < *ne* + *a* + *wiht* 'not ever a-thing') で補強した (7b) の動詞挟撃型二部構造 (bipartite structure) へ移行した後 (フランス語の *ne ... pas* 参照)、(7c) に見られるように、EModE 期において否定辞そのものの交代による動詞後置 not の単独否定に至るが、結局現在の PSE では、近代英語期における否定平叙文での助動詞 do の確立 (中村 (1994) はその時期を 1650-1700 年としている) に伴って、<sup>4)</sup> (7d) のように再び Stage I と同じ位置、すなわち don't を動詞に前置させる位置に戻ってきてしまっている。「循環」と呼ばれる所以である。

本稿で取り上げる問題に関わる部分はだから、(7c) と (7d) の Stage III と Stage I' であることが分かる。つまり、PSE においてもなお、その一部用法において Stage III と見られる用法を維持し続けている語彙動詞があるということである。したがって、現時点でこれら否定構造の表面的連鎖を見る限り、(5a, b) で示した believe, suppose, think は、既に Stage I' にまで到達しているにもかかわらず、同時に Stage III の方式もまた温存していることになり、一方 hope は、Stage III に留まったまま Stage I' に移行していないように見える。<sup>5)</sup>

さてそうであれば、ここでの疑問点は次の二点になろう。

- (8) a. think 等のいわゆる思考動詞は、既に Stage I' に到達しているにもかかわらず、なぜ依然としてその一部において Stage III と見られる方式を維持しているのか。  
 b. なぜ hope は、思考動詞と同類にもかかわらず、Stage I' に移行せず、Stage III と見られる方式に留まったままなのか。

この問題に関連して、Yadomi (2015) が興味深い報告をしている。英語において語彙動詞の否定平叙文での助動詞 do が確立するのは、すなわち do 否定が do-less 否定を上回り足場を固めたのは、前述の通り 17 世紀後半あたりであろうと考えられているが、もちろんこれは「完全なる」do 否定への即時移行を意味してはいない。<sup>6)</sup> 実際、続く 18~19 世紀においても一部動詞においては依然として do-less 否定が残存し続けた。Nevalainen (2006: 109) が指摘する、統語上の変化における「語彙拡散 (lexical diffusion)」である。このことについては、これまで様々に論じられてきたが、Yadomi (2015) は、その後の時代の実態を明らかにすべく *The Corpus of Historical American English* (COHA) を使用し、これに 20~21 世紀の米語 (American English) データを付け加えた。それによると、19 世紀後半まで do-less 否定が見られた動詞として、know, doubt, care, come, see, mistake, think, fear, go, say, make, find, take を取り上げている。しかし 20 世紀までとなると、その内まず find と take が脱落する。そして 21 世紀の現在もなお do-less 否定をも維持しているのは、know と care のみである (Yadomi (2015: 52)).<sup>7)</sup> ただ、ここで是非確認しておかねばならないことは、これらの動詞は全て do 否定もまた十分に可能な点である。つまり、Stage III と Stage I' を併せ持つ動詞ということである。

さらに、そもそもこれまでの do 否定流布に関わる議論では、上述のような動詞の「節否定 (clausal negation)」における振る舞いと「局所否定 (local negation)」での振る舞いととは別個に取り扱われてきたので、「短い返事」などの局所否定用法については十分に検討されてこなかった。しかし、Yadomi (2015) は、局所否定

のうちでも以下の「否定強調用法」(9a)や「程度副詞用法」(9b),そして目下焦点となっている,(5)で示した I suppose not 等の「代用形(Pro-form)用法」もまた,do 否定と(節否定ではないが)表面上 do-less 否定連鎖が「同時に」観察されるため十分考慮に値すると主張している。

(9) a. I said **not/didn't** say a word. (p. 58)

b. I cared **not/do not** care very much. (p. 60)

Yadomi (2015: 59-66)によれば,上記局所否定三用法に関して,21世紀においてなおこのような do-less 否定連鎖を持つ語彙動詞は say, care, know, see, think である。<sup>8)</sup> 節否定のみを見れば,現在もなお do-less 否定を温存しているのは know と care だけに思えたが,これに局所否定の一部を加味すると, say, see, think でも確認できるのである。

そしてこの know と care だが,Ellegård (1953: 199)が言うところの,いわゆる know-group と呼ばれる動詞群に属している(他には, doubt, mistake, fear 等が含まれる)。この動詞群は英語史上, do-less 否定から do 否定になかなか移行しようとしなかった強者どもであり,それは Yadomi (2015)の統計数値を見ても,いまだにその一部で do-less 否定が可能なところに如実に現れている。であれば当然,次の疑問が湧いてくる。

(10) know-group はあれほど激しく do 否定に抵抗していたにもかかわらず,<sup>9)</sup> その中でも特に,圧倒的に do-less 否定を好む know が「短い返事」の局所否定用法に限っては,なぜ通常の I don't know になりはて,節否定の \*I know not を残していないのか。<sup>10)</sup>

### 3 否定辞繰り上げ

児馬(1996: 91-92)は,否定辞繰り上げは,当該の規則が適応される少数の語彙を個別に覚えるタイプの規則である「小規則(minor rule)」であるとし,そのことを think と know を使って説明する(矢印⇒の右側の命題が(11)(12)で伝えられる内容である)。<sup>11)</sup>

(11) a. I think that John is **not** happy. ⇒ John is not happy.

b. I **don't** think that John is happy. ⇒ John is not happy.

(12) a. I know that John is **not** happy. ⇒ John is not happy.

b. I **don't** know that John is happy. ⇒ John is happy.

上例では,Swan (2016<sup>4)</sup>)でも指摘されていたように(11a) = (11b)は成り立つが,(12a) = (12b)は成り立たない。したがって know の場合,従属 that 節中の not を主節に繰り上げることはできないのである。この考え方を推し進めていけば,上記(10)に対する一定の回答が出せそうである。つまり代用形用法では,当該の not は否定命題である従属節の内容の代用であり,主節の know を否定しているわけではないので,否定辞繰り上げが不可能な know では,\*I know not = I don't know が成立しないことになる。I don't know の意味では,短い返事の \*I know not は使えないのである。逆に,I think not では,これ自体は主節の否定ではないにもかかわらず,I think not = I don't think so が成立するのは,think は否定辞繰り上げが可能だからに他ならない。したがってもちろん,従属節や目的語が明示されていれば,19世紀の下例(13)が示すように,(think だけでなく) know の場合も,I know not ... = I don't know... が成立することは言うまでもない(Yadomi (2015: 51), did not との共起にも注目)。

(13) I know **not** why I did not rebuke her, at once, to the dust... [1823]

ところで,児馬(1996: 94-95)が指摘しているのだが,do 否定はこのような小規則から出発し,短期間で一気に,当該の規則が適応されない少数の語彙を個別に覚えるタイプの規則である「大規則(major rule)」化した「分極の仮説(polarization hypothesis)」に当てはまる一例だと考えられている(Ellegård (1953: 162)のグラフ参照)。そして結果的に大規則化したということは,その定義から分かるように,同時にその規則が適用されない少数の語彙が存在することを示唆するが,do 否定の場合,この規則が「通常は」当てはまらない語彙として唯一 hope を挙げることができる一方(註1)と5)参照),think のように(見かけ上も含めて)do 否定も do-less 否定も可能な語彙も存在するという,言わば規則の中間状態を今なお維持していると思われる語彙もあれば,両否定方法が可能な語彙の中でも,上述の know のように,共起する従属節や目的語の有無によって,表面的連鎖における do の出没が左右されるといった特別な制約を持つものまであることになる。

## 4 従属 that 節の so による置換

OED<sup>2</sup> (s. v. *so*, B. I. 2. a.) には、次のような記述がある。

(14) a. With the verbs *do*, *say*, *think*, etc., latterly assuming the function of an object and passing into the sense of 'that'

b. Ne *dyde swe ylcre cneorisse*.

[= Not *did so to-the-same tribe*.]

—*Vespasian Psalter*, cxlvii, 20 [c825]

c. I cannot doubt that they *think so*. —S. T. Coleridge, *Confessions on An Inquiring Spirit*, iii, 37 [1840]

(14a) に示されているように、元々副詞（または接続詞）だった OE swa 'so' が他動詞の代名詞目的語として捉えられるようになった事実は、(14b) の OE の例からも既にその萌芽が十分窺われる。このことはまた、Willis (2016) で主張されているように、否定の不定代名詞である OE *nawiht* 'nothing' が、自動詞でもあり他動詞でもある動詞 (exs) *eat*, *drink*, *read*, *write*, etc.) と共起した場合や「拡張項 (extent argument)」を許す述部 (exs) verbs of succeeding, harming, caring, etc.) に生じた場合などに、新たに「副詞」として全体の項構造が「再分析 (reanalysis)」され、OE 期以降に否定辞 *not* の地位を確立していくこととパラレルな現象であろう（ただし *so* の場合、その方向性は *nothing* とは全く逆になっているが）。

このような *so* の振る舞いが理解されたところで、ここで改めて *think*, *know*, *hope* を含む「短い返事」について考えてみると、以下のような興味深い三者三様の分布が見られる。

(15) a. I *think not*.

(16) a. \*I *know not*.

(17) a. I *hope not*.

b. I *don't think so*.

b. \*I *don't know so*.

b. \*I *don't hope so*.

c. \*I *don't think*.

c. I *don't know (that)*.

c. \*I *don't hope*.

3 節で議論したように、(15) の *think* は、否定辞繰り上げが可能のため従属節の否定も主節の否定も同値として受け入れられるので、(15a) = (15b) が成立する。ただし主節を否定する場合には、本節で見た *so* による支えが必ず必要である。したがって、各例 a. の *not* は、主節ではなく従属節中の否定を表し、'not so' を意味すると考えられる。これに対して *know* は、まずもって、否定辞繰り上げが不可能なため (16b) と同値でないという意味において (16a) は許されないし、そもそも (16b) の *so* そのものが認められない。(16b) は、(16c) の I *don't know (that)* であれば容認されると思われるが、これには I *don't know it* とした場合とは微妙な違いがある。Swan (2016<sup>4</sup>: § 31, 505 & 585) によれば、*know* の場合以下の (18) のように、目的節を代用するときには、 $\phi$  (ゼロ) または *that* として実現されるのに対して、物が目的語である場合は通常通り代名詞の *it* に置き換わる。このことから、動詞によっては、従属節が必ずしも *so* で代用されるわけではないことが知られる（上記 (14a) 参照）。

(18) a. You're late. — I *know*/I *know that*. (= I *know* I'm late.)

b. I went to a nice restaurant called The Elizabeth last night. — I *know it*. (= I *know* the restaurant.)

そして懸案の *hope* を含む (17) については、次節で議論する。

5 I *hope not* vs. \*I *don't hope so*

これまでの議論で明らかになったことは以下の通りである。

(19) a. *do-less* 否定を容認する動詞は 21 世紀の今も確かに存在しているが、同時にそれらは *do* 否定も行うのが普通である。

b. それら動詞には、主に思考動詞や *know*, *care*, *doubt* などの *know-group* の動詞群が含まれる。

c. しかし、局所否定である短い返事に限れば、I *think not* 等を I *don't think so* 等と同値として容認する動詞は思考動詞に限られ、\*I *know not* は使用できない。これは *know* (そして *know-group* に属する動詞) の場合、否定辞繰り上げが不可能なため、I *don't know* と同値にならないからである。さらには、従属節の否定としても \*I *know not* そのものが使用できない（註 10）参照）。

d. 従属節を省略する短い返事では、通常その省略された従属節を *so* や「not so」を意味する *not* で代用しなくてはならない。

まず、2 節の (8a) で提示した疑問点に関わるのが (19a) と (19b) である。大規則には必ず例外が付きまとうものであり、*do* 否定の場合、現在もなおごく少数の例外として *do-less* 否定が付随しているものと思われる。

その例外としては、思考動詞や *know-group*, そして *hope* が考えられるが、3 節で議論したように、正真正銘の例外と言えるのはどうも *hope* のみであり、思考動詞や *know-group* は通常 *do* 否定が規則であると見なして差し支えないようである。というのは、Yadomi (2015) が明らかにしているように、確かに *think* や *know* には、節否定における正真正銘の *do-less* 否定を観察することができるが、その生起自体が非常にまれであり、それよりむしろ目立つのは、局所否定の際思考動詞に見られる「表面上の」*do-less* 否定連鎖の方だからである。このような局所否定で否定されているのは従属節や副詞であり、主節ではないので、節否定の *do* 否定とは本質的に異なる。ただ、それならば、なぜ節否定と同じ *I think not* の連鎖が見られ、\**I think don't/doesn't* や \**I not think* はないのか。これは、前者では、定形助動詞 *do* を従属節の主語なしに主節動詞と並置することはできないからであるし、後者では、Jespersen's cycle により *not* が Stage I' の位置に戻るとすれば、語彙動詞の場合、PSE では必ず *do* による支えが必要だからである。さらには、もしこの後者の連鎖を許すならば、それは「主格主語 + *not* + 非定形」と解釈せざるを得ないので、定形性が消失し非常に都合が悪いことになってしまう。<sup>12)</sup>

次に、そもそも未だに Stage III を維持している語彙動詞群が現在も存在しているのはなぜか、という根本問題が残っている。ここで考えられるのは、*know-group* の場合は、*know nothing*, *doubt nothing*, *care nothing* というふうな、これら動詞と *not* の起源である目的格不定代名詞 *nothing* との統語的・意味的結束力が一際強かったからではないか、そして思考動詞の場合は特に、頻用される談話標識を含む局所否定用法から時として節否定用法へ「逆流」することがあるのではないかということである。

Swan (2016<sup>4</sup>: § 27, 301) は「断定をやわらげたり、訂正することを示す (softening and correcting) 談話標識」の中には以下のものがあるとする。<sup>13)</sup>

(20) *I think; I feel; I reckon (informal); I guess (informal); ... ; [I'm afraid;] I suppose; ...*

そしてこれらのほとんどが、上記のように、従属 *that* 節代用の局所否定用法で使用されており (*I feel* を除く)、*do* 否定だけでなく、*not* が単独で現れるため表面上 *do-less* 否定の連鎖を呈する。そしてこれらは日常会話で頻用されることから、その表面形式が節否定時にも敷衍される可能性は大いにあると言えるのではなからうか。

最後に、(8b) および (17) の *hope* についてだが、*OED*<sup>2</sup> (s. v. *hope*, v. 3 & †4) には、次のような記述がある。

(21) a. with obj[ect]. clause (In mod[ern]. colloq[ui]al. use often in weakened sense, expressing little more than a desire that the event may happen, or (clause in pres[ent]. or past) that the fact may turn out to be as stated.)

b. To expect or anticipate (without implication of desire); to suppose, think, suspect. *Obs[olete]*.

c. *I hope thou'lt vex me .. I shall rail and curse thee, I hope.*

—W. Rowley, *A new wonder; a woman never vexed; a pleasant conceited comedy* (Dosley), XII, 132 [1632]

(21a) がいわゆる従属節を伴う *hope* の用法である。その中で、*hope* にもかつて *think* や *suppose* と同じ機能があったのだが、17 世紀の例 (21c) を最後にこの用法は廃用になっていることが (21b) から分かる。この *hope* は、元来 *think* 等の思考動詞とは違って、*desire* という輪郭がはっきりした意味内容を持っていることに加えて、この廃用のために *think* 等の振る舞いとは一線を画するようになったと思われる。*MED* (s. v. *hopen* v. (1), 2. (a)) には、ME 期での (21b) の用法における節否定が一例確認できる。

(22) Now *hoope* ye not, hynde fader, ne in hert thinke / That I carpe thus for cowardys...

[= Now *hope* you don't, kind father, nor in heart think / that I carp thus for cowardice...]

—*The Destruction of Troy*, 2292-2293 [c1450(?a1400)]

命令文で、しかも当時同類だった *think* と共に使用されている。そこで、いわゆる *hope* の用法においても、節否定の ME 例を *MED* で調べてみると、やはり命令文に遭遇する。二例確認できた。

(23) a. Ne *hope* þu to ræde of heom þat liggeð dede.

[= Don't *hope* thou to advice of them that lie dead]

—*Lazamon's Brut*, 17936 [a1225(?a1200)]

b. Ne *hope* þou noht þat transetorie es.

[= Don't *hope* thou nothing that merely-temporal is]

—*Boethius* (Walton, Lin-C), p. 60 [c1450(1410)]

このような聞き手の欲望 (*desire*) を禁止する用法は、どうやらこの昔ながらの *Ne hope* (= *Don't hope* (for)) という形式であれば、PSE においても *don't* の使用は可能なようだが、<sup>14)</sup> おそらく PSE では、*hope* が平叙文 (特に *I hope*) において従属節を伴う場合、その意味内容からして節否定に馴染まないの、否定的な気持ちは、別立ての *I'm afraid* に負わせるという役割分担ができていたのであろう (そうすれば、\**I'm not afraid* がないことも同時に理解できる)。つまり、*I hope* と *I'm afraid* は相補分布をなしているのである。

## 6 まとめ

表面的な要素の連鎖をただ見ただけでは、PSEにおけるdo否定とdo-less否定との正確な分布は明らかにならない。節否定で真に両否定方式を持つknowやthinkもあれば、そもそも平叙文の節否定では、通常do否定もdo-less否定も容認していないhopeも存在する。節否定だけでなく、局所否定でもnotは単独で現れ、do-less否定の表面連鎖を呈する。そこにさらに否定辞繰り上げ問題が絡んでくる。本稿では、このように両否定方式には非常に複雑に入り組んだ統語上の対立構造があることを示した。

最後に、I'm afraidとの関連で、fearについても触れておく。Yadomi (2015) は、20世紀まで節否定のdo-less否定がfearに見られたというが、<sup>15)</sup>局所否定としてもI'm afraid notの意味でI fear notは使用されたようだ。しかし、現在は通常I'm afraid notのみが使用される。これはfearを使うとやはり、afraidに比べ意味内容の「恐れ」の部分がどうしても前面に押し出て来ると感じられるからであろう。

## 註

\* 本稿は、2017年9月9日に熊本大学で開催された「熊本言語学談話会 (KLC)」で筆者が発表した内容を加筆修正したものである。当日、熊本大学の登田龍彦先生、熊本学園大学のJudy Yoneoka先生には貴重なご助言をいただいた。この場をお借りして感謝申し上げます。

- 1) 英語母語話者の言語学者であるYoneoka氏によれば (p. c.), 「雨が降ろうが降るまいがどちらでもよい」という感じでI don't hope it will rainと表現することはあるという。言わば、I hope soとI hope notの中間的表現らしい。これはしかし、むしろcareに近づいている用法と言えまいか。
- 2) 同様の現象がI'm afraidでも観察される (元々は過去分詞のaffrayedであったが、その後純粹形容詞化し、綴り字まで変化した。当然「恐れ」の意味は薄れ、I suspect/I am inclined to thinkを表す [OED<sup>2</sup> (s. v. afraid, 2. c.)]). 従属節を代用する場合、(ia) は容認されるが、(ib) は容認されない。

(i) a. I'm afraid so./I'm afraid not./Fraid not.

b. \*I'm not afraid so./\*I'm not afraid.

- 3) 中村 (1994: 27-28) や Iyeiri (2005: 5) によると、この循環における (7d) のステージは、オリジナルのJespersen (1917) である *Negation in English and Other Languages* (Copenhagen: Einar Munksgaard) では、以下のようにさらに二つのステージに分割して示されている。

(ii) a. Stage IV: I do not say

b. Stage V: I don't say

さらに、Wallage (2012) は、Stage IのneとStage IIのneとは異質の語彙項目であると指摘している。生成文法において、前者はnotと共起できない [i(nte)rpretable]Neg という素性を持っているが、後者はnotと共起可能な [n(nte)rpretable] Neg という素性を持つという。これは多重否定が単一否定を表し得た時期に、neの意味役割が変化したことを物語っている。

- 4) 小倉 (2015: 50) は、「Doの使用はSVO語順の確立のために必要だったわけで、これにより近代英語成立の基礎ができあがる」と述べている。
- 5) (iiia) のやりとりにおいて、I hope soとI hope notは当然可能だが、より一般的には単なるYes/Noが普通ではないかと思われる。だとすれば、実際に音形として現れるかどうかはさておき、hopeとdon'tは共起可能であり、既にStage Iに達しているとも考えられる。また、(iiib) のように、相手の発言I hope soそのものを否定する、一種の強調用法としてならば、I don't hope soも現れうる。であればやはり、少なくとも原則的にはhopeとdon'tは共起可能と言っているのかもしれない。

(iii) a. Do you hope it rains? — I hope so./I hope not./Yes, I do./No, I don't.

b. I hope so. — I DON'T hope so.

- 6) このようなdo否定への移行の過程において、三人称単数主語にもかかわらずdon'tが現れる興味深い例がTieken-Boon van Ostade (2009: 82-84) によって示されている。一種の「社会言語学的標識」と捉えられるもので、しかもain'tとは異なり、下層階級だけでなく上層階級においても使用されたらしい。

(iv) to engage myself where she don't like

[1711]

関連して、アメリカのハードロックバンドBon Joviが1984年にリリースしたアルバム『夜明けのランナウェイ』(原題 *Bon Jovi*) には、「She Don't Know Me」という曲が収められているが、これは楽曲の歌詞として、doesn'tではうまく音符に合わず歌いにくいのでdon'tにしたとボーカルのJohn Bon Joviがインタビューで語っている。実際他の楽曲でもしば

しは耳にする現象でもある。母語話者の現実的感覚として、文法上の形態論的主語動詞呼応 (concord) が「音符に乗りにくいので変えてもよい」程度のもつと捉えられていることを如実に示す例であろう。

- 7) 以下で明らかになるが、Yadomi (2015) は、Quirk et al. (1985: 881) や Biber et al. (1999: 752-753) を元に、局所否定の代用形用法に典型的に現れるためか、hope (そして suppose/guess) を調査対象にしていない。なお、COHA とは、Mark Davies, (2008-)、<http://corpus.byu.edu/coha/> である (Yadomi (2015: 68))。
- 8) Yadomi (2015: 59, 61) は、これら動詞に加えて、否定強調用法においては get が、程度副詞用法においては come が、20 世紀にはそれらに do-less 否定が全く見られなかったにもかかわらず、21 世紀になって新たに 1,000,000 語中 0.1 回見られたと報告している。しかし、これらの動詞は do-less 否定が通時的に連続して現れていないという点を考慮して、本稿の考察対象からは外す。
- 9) Rydén (1979: 31) も know について、"some verbs have proved more resistant to the periphrasis [= do negation] than others, as know in negative sentences and say in questions." と述べている。
- 10) OED<sup>2</sup> (s. v. not, A. I. c.) では、not の用法として、(va) のように述べられているが、
- (v) a. With ellipsis of dependent clause after certain verbs, as do, have, know, say not. colloqu[ua]l].  
 b. I suppose they've been questioning you...? — Have they not! —M. Allingham, *Flowers for the Judge*, iv, 74 [1936]  
 c. Your father always puts it in the book... I've never known him not —C. Aird, *His Burial Too*, ii, 28 [1973]
- その例として挙げられている (vb) は、聞き手の反応としての表面連鎖において、そもそも従属節の省略になっていないし、(vc) は、I've never known not という形式にはなっていないので、問題となっている I know not は、やはり通常容認されないとと思われる。
- 11) (11) と (12) は、それぞれ Do you think that John is happy? と Do you know that John is happy? に対する回答の可能性があるが、その命題を否定する場合、それらに対応する想定される短い返事は以下のようなようになろう (もちろん know の場合、(viib) は命題を否定することにはならないが)。
- (vi) a. I think that John is not happy. (= John is not happy.) I think not.  
 b. I don't think that John is happy. (= John is not happy.) I don't think so.
- (vii) a. I know that John is not happy. (= John is not happy.) \*I know not. → I know he's not.  
 b. I don't know that John is happy. (= John is happy.) I don't know (that).
- 12) 松瀬 (in press) でも議論しているが、主節であれ、従属節であれ、PSE で「主格主語+非定形」連鎖が生起しているのは、「非事実」を表す、いわゆる伝統的な用語での仮定法/接続法や命令法 (PSE では、伝統的「法」の概念はもはや通用しない) にあたる場合だけであると考えられるので、この場合、この連鎖は適切ではない。
- 13) 前出の Yoneoka 氏は、いわゆる softening の談話標識としては、I reckon 以下のものが当てはまり、冒頭の I think/I feel はより中立的な無色の談話標識ではないかと指摘する (p. c.)。
- 14) Google site:edu では確かに命令文の Don't hope を確認できるが、Yoneoka 氏によれば、実感としてそれがあまり使われることはないらしい (p. c.)。
- 15) 20 世紀を代表する武術家である Bruce Lee は、"I fear not the man who has practiced 10,000 kicks once, but I fear the man who has practiced one kick 10,000 times" と言った。

### 参考文献

- Biber, D. et al. (eds.) 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson.
- Ellegård, A. 1953. *The Auxiliary "Do": The Establishment and Regulation of Its Use in English*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Iyeiri, Y. 2005. Introduction: Studies on English Negation and the Present Volume. In Y. Iyeiri (ed.), *Aspects of English Negation*, 1-11. Amsterdam: John Benjamins.
- 児馬修. 1996. 『ファンダメンタル英語史』東京：ひつじ書房.
- Kurath, H. et al. (eds.) 1956-2001. *The Middle English Dictionary*. Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press.
- 松瀬憲司. In press. 学校英文法における「法」について—英語史的観点から—. 西岡宣明・福田稔 他(編)『ことばを編む』東京：開拓社.
- Murray, J. A. H. et al. (eds.) Prepared by J. A. Simpson and E. S. C. Weiner. 1989. *The Oxford English Dictionary*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.
- 中村不二夫. 1994. Do を伴う否定平叙文の確立—17-19 世紀日記・書簡からの検証—. 『近代英語研究』, 10, 27-45.
- Nevalainen, T. 2006. *An Introduction to Early Modern English*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.
- 小倉美知子. 2015. 『変化に重点を置いた英語史』東京：英宝社.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

- Rydén, M. 1979. *An Introduction to the Historical Study of English Syntax*. *Stockholm Studies in English*, LI. Stockholm: Almqvist & Wiksell.
- Swan, M. 2016. *Practical English Usage*. 4th edition. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Tieken-Boon van Ostade, I. 2009. *An Introduction to Late Modern English*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.
- Wallage, P. 2012. Quantitative Evidence for a Feature-based Account of Grammaticalization in English Jespersen's Cycle. In T. Nevalainen and E. C. Traugott (eds.), *The Oxford Handbook of the History of English*, 721-734. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Willis, D. 2016. Incipient Jespersen's Cycle in Old English Negation. In S. Vikner, H. Jørgensen and E. van Gelderen (eds.), *Let us have articles betwixt us: Papers in Historical and Comparative Linguistics in Honour of Johanna L. Wood*, 465-491. Aarhus: Dept. of English, School of Communication and Culture, Aarhus University.
- Yadomi, H. 2015. The Regulation of the Auxiliary *Do*: *Do*-less Negative Declarative Sentences in American English from 1800 to the Present Day. *Zephyr* [Kyoto University], 27, 44-70.